

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

【図書紹介】『21世紀の哲学をひらく：現代思想の最前線への招待』（齋藤元紀・増田靖彦編 ミネルヴァ書房 二〇一六年）

著者	古屋 俊彦
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	14
ページ	71-71
発行年	2018-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/13884

【図書紹介】

『21世紀の哲学をひらく——現代思想の最前線への招待』

(齋藤元紀・増田靖彦編 ミネルヴァ書房 二〇一六年)

古屋 俊彦

流行を追うのではなく二十一世紀初頭の今からも影響を持ち続ける二十世紀の思想家による様々な哲学的考察の所在を探る事、全体的な知を指向していなくてもそれらの考察に通底する隠れた共通の課題を探る事、通常哲学とは言われていない領域に息づく哲学的考察を探る事、この様に冒頭で説明されている論集の企画意図は散発的ではあるが各論文の中に読み取れる。全体は言語圏毎に便宜上三つに分類されている。ロマンス語圏では、フィリップ・ラクー＝ラバルトとジャン＝リュック・ナンシーの政治的なものと哲学の役割および哲学の終焉に関する両者の思想の分岐点、フェリックス・ガタリ、ミシェル・アンリの生の現象学と木村敏、ジャック・ラカン、アントニオ・ネグリとマッシモ・カッチャーリとジョルジョ・アガンベンとロベルト・エスポジトなどが紹介されており、個別的に踏み込んだ哲学的考察が窺える。ドイツ語圏では、ユルゲン・ハバースとニコラス・ルーマンとハンス＝ゲオルグ・ガダマ

ーによる実践哲学の論争、ヴァルター・ベンヤミンのアレゴリー思考とハンス・ブルーメンベルクのメタファー学、テオドール・アドルノとユルゲン・ハバースとアクセル・ホーネットなどによる承認論の批判的継承が紹介されており、哲学的考察の特異性を論争的にそして実際の論争や批判を通して継承する様子が窺える。英語圏ではスタンリー・カヴェルによる日常言語と文学、ジョン・ケージによる音と音楽、ジュデイス・バトラーによる性の多様性、コーラ・ダイヤモンドによるヴィトゲンシュタインの倫理学、フレーゲとラッセルとストローソン、ドネランとクリプキ、カルナップとタルスキ、カプランとパトナム、チャルマーズまでの言語哲学が紹介されており、様々な領域に特に言語活動の中に掘り起こされた哲学的考察が窺える。

かつてあらゆる学問が哲学と呼ばれていた。次第に対象を限定して成果を上げる研究分野は哲学ではない事になった。それでも学問の全体構想は哲学の仕事だった。だがそれも挫折して顧みられなくなった。そもそも哲学には特別な役割など無かった様にも思えてくる。そんな時に改めて哲学の地道な役割を突き止める仕事は一見むなし。だが意外に出てくるものなのだ。散発的ではあっても確実な哲学の役割を今こそ掘り起こすべきと思わせてくれるのは、この論集に執筆している哲学研究者が諦めていないからなのだろう。